

近代ゼミ 今年度の研究内容

川上 臨夢 浦野 智子 大石 千尋
松下 雅貴子 田代 あゆ

今年度の近代文学ゼミでは、各自で好きな作品を選び、それについて読みを深め、得たものを発表しあつた。

今回は、ゼミ員の研究内容をご紹介します。

菊池寛『真珠夫人』魅力の再検討

大石 千尋

一 はじめに

『真珠夫人』は大正九年六月九日から十二月二十二日まで「大阪毎日新聞」と「東京日日新聞」に掲載された作品である。作者は菊池寛で、この小説は通俗小説の流れに新機軸を打ち出し、同時代的にかなりの好評を博したものであつた。近年、『真珠夫人』のドラマが話題を呼んだが、小説とは大分物語の趣旨が違つているように思えた。

『真珠夫人』は、清廉の士として知られる父親を金の力と奸計で窮地に陥れられた瑠璃子が、強奪するように自分を後妻に娶つた成金莊田を決して許さず、処女の純潔を守り通しながら、その魅力と上辺だけの媚態をもつて苦しめ、やがて復讐を遂げる、という話だ。莊田の死後は、

男性の横暴に復讐しようとし、その妖艶なる美貌と金とを武器として青年の多くを引きつけ翻弄した。その青年の中の一人、青木稔によつて彼女は刺され、死に際に義理の子を初恋の直也に託す、というところで話は終わる。

先行文献の中で前田愛氏は、この作品について次のように分析している。

清純な美少女、復讐を誓うユーディット、娼婦型の驕慢な未亡人、継娘を庇護する義母、この四つの役割を瑠璃子はつぎつぎに演じ分けて行く。従来の家庭小説が複数の偏平な登場人物に分割していた諸類型は、瑠璃子ひとりに複合された趣である。しかし、それは複合ではあつても、統一ではなかつた。三度の転回毎に瑠璃子の心理と行動は不自然な飛躍を余儀なくされているのである。プロット構成の誤算といいかえてもいい。『真珠夫人』のプロットは独立した幾つかの中編を接ぎ合せたような印象を与え、長編としての流露感と一貫性に欠けている。あるいは幕間の長い四幕の戯曲として構成されている。それは短編作家から長編作家へという転換を強いられた菊池寛の苦渋を物語るものかもしれない。

これを軸にして、「プロットの誤算」「四つの役割」などについて、それぞれ検討した。

二 「プロット構成の誤算」

前田愛氏の分析を受けて、田口律男氏^②は次のように指摘する。

的確な分析と言うべきだが、〈プロット構成の誤算〉という指摘には、やや疑念が残る。なぜなら、ヒロインの〈三度の転回〉の因果関係が希薄かどうか、〈流露感と一貫性に欠けている〉かどうかの判断の基準が曖昧であるからだ。もちろん、現代の精読者が、全集等で通読し、主人公のコードに準拠して、その人格的な自己同一性を要求すれば、不満が残ることは否定しない。しかし、新聞連載小説の〈分割鑑賞〉を享受する当時の読者の読書行為の過程において、そうした〈プロット構成の誤算〉からくる不満が生じたかどうかは、必ずしも自明ではないのである。

また、田口氏は志賀浪子の同時代評を紹介し、次のように続ける。

同時代の女性読者にとって、ヒロインへの感情移入がさして困難ではない（自然）な人物造形であったことが理解される。むしろ、ここでは、策略によって瑠璃子を籠絡しながら、やがては改心していく荘田勝平のシークエンスの方に〈不自然〉さを感じているように、当時の読者は、「待つ時間」の中で、及ぶ範囲のイマジネーションを働かせ、積極的にテキストの空所を補充しつつ能動的な読書行為を展開していたことが伺えるのである。

ここでは、『真珠夫人』が新聞連載小説であったことに焦点が置かれている。だから読者はこの作品を「分割鑑賞」せざるをえず、瑠璃子の性格が「自己同一性」には不満が残るものであったとしても、それによって作品自体には不満は起きないのである。さらにいえば、前田愛氏の「中編を継ぎ合わせた」作品という指摘も、元が新聞連載小説だから、あたりまえのことなのである。

三 「四つの役割」

前田愛氏が、瑠璃子の人格を「四つの役割」に分けたことを、日高昭二氏^③は、次のように指摘する。

ヒロインを四つの役割に分割してしまったのはほかでもない、このヒロインにはついに「内面的な成長」というものがないとする評価があるからである。とすれば、残るは「家庭小説」のそれを処女型・母性型・娼婦型などに分類した方法によって、ここでのヒロインを、それと同一と差異のうちに見る以外にはない。（略）——ここで最も不審なことは、そういうヒロインを読者に媒介する視点人物の存在が忘れられていることなのである。おそらくその忘れが、いうところのプロットの「欠陥」やヒロインの「分割」という読みを導いたのかもしれない。ここで挙げられている「視点人物」は、渥美信一郎という大正期の間層を代表する職業インテリのことである。さらに、日高氏は、『真珠夫人』のプロットは、「欠陥」の露呈どころか、冒頭の細部からして、その符節は巧みに調合されていたのである。」と主張する。そして、『真珠夫人』のプロットは、いわば〈愛と信〉というモラル・システムが〈金と権力〉のパワー・システムに勝つというコードによって成立し、それら二つのシステムの変換のなかに、まさに〈時代〉を写す鏡を立ててみようとするテキストなのである」とまとめている。

四 まとめと今後の課題

『真珠夫人』は、なぜ成功を果したのか。浅井清氏^④はこうまとめている。

『真珠夫人』の登場人物たちはそれぞれ揃って何らかの欠点や弱点を持っている。従来の通俗小説や時代小説では完璧な善人と完璧な悪

人の対立と葛藤で終始した。ところが『真珠夫人』では善人は必ずしも善でなく、悪人もまた悪に徹し切れていない。それは真珠のような純粹性に憧れながら復讐の炎を燃やし続けた瑠璃子も然り、治を吐くような悔恨に苛まれる男爵も同様である。また、傲慢不遜な莊田には人間的な善良さや弱さが付け加えられていた。清廉潔白の標榜する貴族院議員も金銭万能主義の新興成金も、そして魅力溢れる美貌のヒロインも、あたかも不完全な存在だからこそ、〈現代〉に生きる資格があるのだと主張しているようである。

瑠璃子の心理や行動を、不自然な飛躍とみるのは、人物を一面だけで捉えようとしているといえるだろう。また、浅井氏によると瑠璃子をはじめ、『真珠夫人』の登場人物は「不完全な存在」と捉えられているが、「完全な存在」（ここでいう〈完全〉とは善人が善人に徹し、悪人が悪人に徹することである）が作品中に登場してしまつては、かえつて作品自体にリアリティがなくなってしまうだろう。

今後は、作品の書かれた時代の社会情勢や事件について調べる。また、新聞連載小説の特徴について研究する。『真珠夫人』の魅力をたくさん発見していきたい。

参考文献

- (1) 前田愛『近代読者の成立』（有精堂 昭和四十八年十一月）
- (2) 田口律男「プロットの力学／大衆小説の引力―菊池寛『真珠夫人』の戦略」（『日本近代文学』五十巻 平成六年五月）
- (3) 日高昭二「貞操の市場―菊池寛『真珠夫人』ノート」（『資料と研究』二巻 平成九年一月）
- (4) 浅井清「欲望と争闘の家族譚として『真珠夫人』―菊池寛」（『国文学』四十二巻 平成九年十月）

『くれない』―明子と子供たち―

川上 臨夢

一 はじめに

佐多稲子の『くれない』は明子と広介の夫婦の間の問題が中心に描かれているが、『くれない』には明子と子供たちのふれあいの場面も多い。今回は明子が子供を求めるときと、反対に子供が明子を求める場面から、母子の関係について見ていきたい。

二 先行研究

明子と子供の間関係については、小林美恵子氏が「『くれない』論―母性への回帰―」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第五巻 一九九九年三月一五日）のなかで、「明子を中心に据えて、広介と子供たちとの関係がパラレルに描かれていたのは、すなわち〈夫との愛や思想〉と〈母性〉との間を揺れ動く佐多の心象風景が明子に投影されたもの」であったと指摘されている。

三 明子が子供を求めるとき

明子が子供と一緒にいる場面は多いが、明子がかきりと子供を求めているのは、①国府津へ旅行する場面（一章）、②拘留後、行一を連れ出して散歩する場面（六章）、③広介に「女」がいると知らされた場面（二一章）の三場面である。

これらの場面からは、広介に感情を傷つけられた明子が子供を傍に置きたがっていることが読み取れる。明子は無意識に、子供へ救いを求めているのではないだろうか。

四 子供が明子を求めるとき

では次に子供たちであるが、子供たちが明子を強く求めるのは、明子が不在のときである。それは検挙された明子の面会に来た行一が駄々をこねる場面や、祖母・お手伝いのやす代・子供たちだけで海へ滞在し、明子の訪ねるのを待ち続ける場面に現れている。

さらに明子があつと海へ行くと、子供たちは「待ち兼ねていた母親が今日は部屋の中にいる、という単純な満足」を感じていて、明子に纏わりつくことはない。

子供たちにとつては、ただ明子が傍にいたことが重要なのであり、要求なのである。その必要とされる感覚は、広介を失う喪失感に打ちのめされている明子にとって、確かに救いだっただろう。

五 まとめと課題

以上のように、広介によって傷ついた明子は子供たちを求め、子供たちは明子が傍にいたことを喜んでいる。

今回は「子供たち」とまとめて考察したが、明子が行一だけを相手にする場面も目立つ。なぜ行一なのか。今後は行一と徹子それぞれの役割についても考えていきたい。

テクスト

佐多稲子「くれない」は昭和十一年一月から五月に『婦人公論』に連載され、最終話は『中央公論』（昭和十三年八月号）に掲載された。なお、本稿引用はすべて『佐多稲子全集 第二巻』（講談社一九七八年）によつた。

三島由紀夫『詩を書く少年』

——（詩）の崩壊——

田代 あゆ

『詩を書く少年』は、佐藤秀明氏、和田博文氏ら先行文献で述べられているように、三島由紀夫が少年時代（自身を詩人だと思っていた時代）を醒めた目で皮肉を交えて書いた自伝とも言える小説である。

十五歳の少年は自分を天才だと信じ、〈言葉〉を感情の元素と考え未経験を嘆くこともなかった。少年は〈詩〉を生み出すときに発生する〈幸福〉を彼だけの、どんな不幸や懊悩も打ち倒すことができるものだと考えていた。少年にとつて〈詩〉とは「生理的でないやな感覚」「あらゆるものと別物」であり、彼が〈詩〉を考へるときは「恍惚感。充実した孤独。非常に軽やかさ。すみずみまで明晰な酩酊。外界と内面との親和」を感じるができる。少年にとつて「外界」とは〈現実〉と〈人生〉をさす。それと対立するのは「内面」でありそれは〈夢〉や〈観念的世界〉をさす。『詩を書く少年』の少年は、まだ「内面」に住んでいる状態である。三島は『文学に於ける春のめざめ』においてこう述べている。思春期に於いては人生は夢みられる。われわれは生きることと夢みることと両方を同時にやることができないのであるが、かういふ人間の不器用に思春期はまだ気づいてゐない。（中略）思春期は、そこに想像されるどんな悪もかうした潔癖な気負うさをもつてをり、人生の実用に役立つあの念の入つた不器用さと比べて、はるかに透明で自由な世界が予定されてゐる。（中略）思春期を殺してしまった詩人といふものは考へられない。¹

少年は思春期（観念的世界）の最中にある。少年の思春期は彼の〈詩〉

と「幸福」によって成立しており、彼はその世界が「現実」であると信じていることができる。しかし、贗物の現実には永遠ではない。なぜなら、少年は「外界」を完璧に遮断することができなかったからである。また、少年はその「外界」からの指摘に対して「内面」を守り続けるだけの力もなかった。「年齢の劣等感」のためである。少年にとって「年齢の劣等感」が何ものよりも強かった。これに関しては和田博文氏も

少年は自分を「天才だと確信」しながら、他方で「僕が十五歳だといふんで、みんながさわいでくれるにすぎない」と冷めた目で自己対象化している。²⁾

と指摘している。未経験を嘆かない側面と、「年齢」という「現実」の側面の二つを同時に持ち合わせている。また、友人Rの手紙から友人Rの「現実に対する危惧、やがて直面しなければならぬものへの不安」を認めており、それが「自分の手紙には決してない」ことも認めている。これらのことからわかるように、少年の思春期（観念的世界）は完璧でない。遮断しきれない「外界」によって少年の思春期は確実に崩壊しているのである。思春期の崩壊は「詩」の崩壊につながった。「思春期を殺してしまった詩人といふものは考へられない」からである。少年の思春期に決定的な打撃を与えたのは、友人Rの現実の恋を目の当たりにした時に感じた不快感、認識の中に必ず入ってくる「滑稽な夾雑物」への目覚めである。三島はこの「詩」の崩壊について

彼を襲う「詩」の幸福は、結局、彼が詩人ではなかったという結論をもたらすだけだが、この蹉跌は少年を突然「二度と幸福の訪れない領域」へ突き出すのである。³⁾

と書き、佐藤秀明氏は、

つまり「現実」と相渉らない「言葉」の「幸福」がここにはあり、

この「幸福」に冷水を浴びせるのは「現実」すなわち「僕も生きてゐるのかもしれない」という予感である。⁴⁾

と書いている。しかし、『詩を書く少年』では、思春期が完全に崩壊し、少年が「二度と幸福の訪れない領域」へ完璧に入るまでにはまだ達していない。

『僕もいつか詩を書かないようになるかもしれない』と少年は生まれてはじめて思った。しかし自分が詩人ではなかったことに彼が気が附くまでにはまだ距離があった。

と、本文ラストにあるように、少年が詩を書かなくなるまでにはまだ「距離」があるのだ。三島由紀夫は「詩」について、

少年時代にあれほど私をうきうきさせ、そのあとではあれほど私を苦しめてきた詩は、実はニセモノの詩で、抒情の悪酔だった。⁵⁾

と述べている。三島は『詩を書く少年』において、少年と三島自身を重ね、「詩」を書いていた少年時代の自分を、感覚的な言葉を操り天才だと思いつく、一種のナルシズムを強調している。少年は友人Rのナルシズムに滑稽さを見出し、さらにそれが自身にもあるものだと思いつくわけだが、更に、ラストでまだ気づきながらも「観念的世界」を抜け出すには「距離」があることを第三者の視線を通して書くことにより、より一層当時の自己批判を濃くさせているように思える。冒頭で、醒めた目で皮肉を交えて書いたと述べたのはこのためである。

以上のことから『詩を書く少年』は、まず、少年が「詩」という「観念的世界」、または思春期が徐々に崩れ去っていき、その結果（現実）「自我」に目覚めはじめたまでを書いた小説だといえる。またその背景には作者三島由紀夫自身の体験と、「散文書き」「小説家」で生きようとするがために「詩」を過去のものとして突き放そうとする、決別の思い

が込められているとも取れるだろう。

しかし、少年が完璧に思春期を崩壊させるまでに距離があるように、三島自身も〈詩〉との完璧な決別までには、『詩を書く少年』を書いた時点では至っていない。なぜなら、三島の作品にはこのような〈観念的世界〉からの脱却、〈現実〉を生きようとするまでの葛藤と取れるテーマの作品が『金閣寺』『沈める瀧』『海と夕焼け』等、多くあるからである。三島由紀夫にとって〈観念的世界〉から〈現実〉への図式はどのような意味をもっていたのか、そもそも三島の考える〈観念的世界〉とはどのようなものだったのか、今後作品を比較しながらより考えを深めていきたい。

注

- (1) 三島由紀夫「文学に於ける春のめざめ」(三島由紀夫著『三島由紀夫全集』27『新潮社』二〇〇三・一)
- (2) 和田博文「詩」の終焉―三島由紀夫の憧憬とアポリアー(松本徹ほか編『三島由紀夫論集』2)三島由紀夫の表現』勉誠出版 二〇〇一・五)
- (3) 三島由紀夫「解説」(三島由紀夫著『花ざかりの森・憂国』新潮社 一九六八・九)
- (4) 佐藤秀明「現実が許容しない詩」と三島由紀夫の小説(松本徹ほか編『三島由紀夫論集』2)三島由紀夫の表現』勉誠出版 二〇〇一・五)
- (5) 三島由紀夫「私の遍歴時代」(三島由紀夫著『三島由紀夫全集』32)新潮社 二〇〇三・七)

『獄門島』

—— 獄門島における「家」 ——

松 下 雅貴子

『宝石』に一九四七年四月から一二月まで掲載された『獄門島』は、横溝正史の金田一シリーズの中で一番の評価を得ている。俳句を使った見立て殺人で、この作品は日本を代表する探偵小説になった。

ここではこの作品に見られる「家」制度を見ていきたいと思う。「家」制度は他の横溝作品にも多く見られる。この作品もその例外ではない。戦後一年経過してもなお、地方ではなお旧態依然とした社会が取り巻いていた。そしてこの作品の犯人の動機も「家」を守ることを目的としていた。この島の人間にとって「家制度」とは一体何だったのか、「家」と女たちを中心に、それを考えてみたい。

一 早苗

早苗は本鬼頭の家分の娘だが、両親を早くに亡くしたため、本鬼頭に引き取られた。本鬼頭の千方太と彼の三人の妹たちにとっては、従姉妹にあたる。

早苗が居る本鬼頭は当主不在という、網元にとっては危機的状況に陥る状況にあるこの家では網元としての仕事と屋敷のきりもりを彼女が一手に引き受けている。その手腕や島民が驚くほどのものだった。

女の身であり、また本来ならば分家筋にあたる早苗が網元の仕事をすすめる理由は本鬼頭の人間に常人がいないということと、戦争の影響で和解男を奪われたことよって女に男以上の働きを求められた時代の流れに起因する。

戦後社会の変化が漁村にも影響を及ぼすことを覚悟している程の彼女だが、金田一と一緒に上京しないかと誘われても、「家」のためにこの誘いを断っている。島に残り、婿を取って本鬼頭を守るためだ。この決断は本鬼頭という「家」のためというよりも、家族同然である「網子」を守るためのものだと思っていだらう。

二 お志保

お志保は早苗の対極に位置する女だ。獄門島にあった巴屋という網元の娘だった彼女は、現在本鬼頭の唯一の敵である分鬼頭の当主の妻になっっている。彼女は本鬼頭次期当主の嫁になることを望んでいたが、没落した家の娘であったため、無視された。「家」によって自らの望をないがしろされた彼女は本鬼頭と敵対する分鬼頭に嫁入りしたのは復讐のためだった。

彼女の企みが一連の殺人事件を呼んだと言ってもほとんど相違ないだらう。「家」で得た憎しみを「家」を使って晴らしたのだ。彼女の働きにより分鬼頭は島一番の網元となったが、それも二年後の「漁業法」改正による網元解体に耐えられたか、定かではない。

この作品で描かれた「家」は滅びの手前にある。網元という封建的で、豪奢を極めたものが滅ぶ前の一瞬を横溝は描き出している。

吉本ばなな「キッチン」から読む新しい家族像

浦野 智 子

一 研究テーマ

吉本ばななの『キッチン』は、「旧世代の人間には想像もつかないような感覚」を、伝統的文学教養を全く無視して、奔放に描いた作品」として、一九八七年『海燕』新人文芸賞選評で述べられた。多くの論文で「革新的」といわれるこの作品の所以は、まずひとつに若者に絶大的に支持された〈斬新な表現方法〉と、もうひとつに〈全く新しい家族構造〉があげられる。ここでは〈新しい家族構造〉について、従来とはどういった点で斬新であるのかを読み解いていきたいと思う。

二 作品内の家族について

作中にはいくつかの家族の様子が描かれている。これは大まかにわけて二タイプに分けることができる。みかげたちの〈現代の標準から欠けた家族〉と、みかげの周囲の〈現代、ないしは少し古い時代に見られた標準的家族〉である。

まず、〈父・母・子〉という現代の標準的な〈核家族〉から欠ける家庭として、主人公・桜井みかげの家族、〈祖母―孫〉の家庭。次に、みかげが引き取られることになる母親が死にその後「女になった」父親、いわば父とも母とも言えない、えり子と息子雄一の田辺家。どちらも標準的な〈核家族〉の条件を満たしていない。祖母と暮らした年月を、みかげは「愛されて育ったのに、いつも淋しかった」とし、「雄一もそうだと思う」と彼を自分と同列に位置づけている。そして、その孤独の中で「自分も輝くことだけがたつとひとつ、やれることだと知った」と、〈孤

独)に面して(個)としての自立の意思が見受けられる。

続いて対照的にあげられるのが、(父・母・子)とすべてそろった家庭である。みかげの職場の友達、典ちゃんの家は「良家」であり、彼女のお母さんは「恐縮するほどやさしく柔らかい」人で、「典ちゃんの一日の予定を普通にすべて把握」している。

またみかげの元・恋人宗太郎の家庭は「大家族」であり、彼はその長男であった。

この二つの家族に対し、酒井一郎氏はこう引用している。

「個人の自由・自立・権利」の自覚と引き換えに、疑う余地のない家郷の世界に根をおろしてくつろげる「安住性」をうばわれることになる。(酒井一郎「キッチン」のテクストで〈家族〉を考えること

(II)『聖カタリナ女子短期大学紀要』一九九七)

つまり良家の娘であることも、大家族の長男であることも、自由をある程度制限させられ、一定の義務を負うことにはなるが、代わりに〈家〉という制度内にあることで〈安心感・安定感〉を得ることができのだ。逆に〈安住性〉を欠いたみかげと雄一は、孤独を内包しているが「自分が輝くこと」、(個)としての自由と自立を手に行っている。二つのタイプの家庭には、こうした違いが読み取れる。

大まかに二つにわけたが、(現代の標準から欠けた家族)を更に分けると、新しく第三のタイプとして(みかげが加わった後の田辺家)があげられる。「全くの赤の他人」であったはずの雄一と、えり子さんと暮らし

はじめたみかげは「妙な明るさ、安らぎ」を手にする。津田洋行氏は、この関係を「血縁によらない共同性としての《新しい家族》を予想していることになる」(「吉本ばなな〈キッチン〉論——トランス・ジェンダーの視点から——」『論究』一九九二)とし、「孤独—自立—連帯—自由」と表している。(連帯)しながらも(個)として、自由に生きている。みかげが加わる前の田辺家も(あるいはみかげと祖母の家庭も)大方かわりはなかったであろうが、あくまでそれは血縁関係内であった。しかし、ここに他人であるみかげが加わってもその関係に揺るぎがないところが新しく、その家族構成に(ジェンダー的役割を感じさせない)ところが吉本ばななが評価された所以である。これをここでは(連帯家族)と定義したいと思う。

三 キッチンにおける〈連帯〉する家族構造

次に、〈連帯家族〉の形成について考えたい。自立した(個)が連帯するのにもっとも重要となるのがその〈距離〉であるだろう。(標準的な血縁関係の核家族)においては互いに親密に結びついており、余程のことがない限り、家族と縁を切ったり離れたりはしないだろう。しかし、単に〈連帯〉しているだけならば、お互いに適切な距離で接せられなくなったときは、いつ離れて、たとえば二度と会わなくても不思議はない。(標準的な家族)がびったりと癒着している状態ならば、〈連帯家族〉は互いに手をつないでいる状態と考えられる。その手と体の距離がどの程度の位置なのか、どの程度の距離が適切なのだろうかと必然的に考えるのではないだろうか。

その例として、えり子さんという中心を失ったみかげと雄一は、お互いどの程度の距離で接したらよいかかわからず、「宙にういたまま」の状態

で過ごす。みかげが「雄一を失いたくない」と必死の行動にでたのも、事実（二度と会えなくなる）可能性も十分あることを、認識していたからに他ならない。〈連帯〉にはいつ離れるともしれない〈不安〉と、〈距離〉が絶えず付きまとっているといえるのではないか。

今回大まかな枠組みになったが、〈新しい家族構成〉の存在の要になっているとめぼしをつけている、〈自由であるがこそその距離〉と〈個の責任〉の詳細について今後も調べたい。